

「我ならずして」を開く対話

——イエスの言葉／禪の言葉——

上田閑照

八木誠一さんとはもう四〇年以上も前から、あちこちの場所、さまざまな集まりでしばしば一緒に知り合いという以上に親しいつながりになってきた。知り合ったはじめての頃の若い八木さんは新進の新約聖書神学者であり、すぐれた古典文献学者であったが、当時の日本キリスト教学界からはかなり異端視されているように見えた。しかし、クリスチャンでもなく神学者でもない私は、八木さんの折々の言葉になんとなく同感し、そしてその同感が何を意味するのか、気になっていた。どのような集まりにおいても、何かのきっかけで八木さんと私とのやりとりになり、しばらくの時間を費やすのが慣例のようになった。何十年

のその経過は、振り返ってみると、上田の個人史的にも、八木・上田の「我々」史的にも、おのずからいくつかの時期が画されているように思われる。最初の時期には、八木さんの話や発言に対して上田が批判的な質問を繰り返した。その答えのところで私は八木さんへの同感が生まれるのを覚えた。やがて、八木さんを自覚的に理解しようとして質問を繰り返す第二期になる。仏教徒であり宗教哲学を研究領域にしている私が、八木さんの言葉を私の言葉で言い換えて―仏教的に言い換えるのではなく（それはそもそも不可能）八木さんと私との「間」^{あいだ}に思想の新しい空間を構想しつつ、その空間へと翻案して、八木さんにそういう理

解でいいかどうかを確認する問いを繰り返す時期が続く。これは、いまにして思えば、解釈学という一種の地平融合を踏まえての理解の試みであったと言えるよう。さらにその後の時期になると、誰かの質問に答える八木さんの言葉が質問者にすぐに理解されないような場合、いわば自分で買って出て、質問者に対して八木さんの答えを質問の地平に向けて私が敷衍する。これは私にとって期せずして八木さんを理解する咄嗟の応用問題でもあった。

一応以上のように時期を分けることができると思うが、それは四〇年にも及んだ連関の交錯の中においてであり、実際には重なり合ったり、混在したり、行きつ戻りつであったりした。このようにして八木さんとかかわりは意義を濃くしつつ現在にまで及んでいる。この度の対談は私の考えの総まとめのような形にもなった。ただその全部が対談に現れているわけではないので、私の自覚への確認のために、また関心のある読者のために、上田における現在の思索圏への示唆的指標として、以下、説明抜きでキーワードと根本句と

をいくつかの組み合わせで挙げておきたい。これによって読者の方々も『対談評釈』における上田の背景ないし基盤に触れていただければ幸いである。

「人間として生きる」根本動態は「生命―生（生活／人生）―いのち」。その場所は、「生命」は「自然」、「生活／人生」は「歴史的社会（世の中）ないし世界」、「いのち」は「限らない開け」。その現実態にはさまざまな歪みや頽落態がある。たとえば、豊かさを価値とする「生活」至上主義が人生の真実を塞いでしまうというように。

「人間として生きる」根本動態はまた、「生きながら考え、考えながら生きる」。その現実態もまた両義的。「考える」が「生きる」を自覚化し、「生きる」が「考える」を生命化することもあれば、逆に「考える」が「生きる」を抽象化し、「生きる」が「考える」を不徹底にすることもある。

性善説ならず性悪説ならず、「人間存在の根本的両義性・不安定性」。したがって、どうするかが人間自身に根本的に問われている。「自分で」すべてが決められる

のではない。しかし「自分で」をとおしてはじめて自分を越えたものに触れることができるのである。

主体の基本構造は「我は、我ならずして、我」。現実には「我は我」と固まってしまう自己固執か、「我は、我ならずして」で立ち消えてしまう自己喪失か。「我は、我ならずして、我」が現実になるのは、「我ならずして」において他者と自然とに親しむことよってである。

人間存在は「何処に於いて」あるか。「世界と、世界を超え包む限らない開け」との見えない二重性（虚空・世界へ世界・虚空）。世界の見えない二重性が見られずに、世界だけの世界に固まる歪み。

「我と我々、我々と集合体」。「全体は個の集合であると同時に質的にそれ以上（全体の二重性）。個は全体の中の個であると同時に質的に唯一の深い独自の個（個の二重性）」。「全体と個は、さまざまなレヴェルで互いに還元できないギャップを挟んで人間存在をなす。そこからまた、さまざまな歪んだ現実態（全体主義ないし個人主義）に陥る。全体も個もそれぞれの二重性が確保される動態は制度化、方法化され得ない。どうす

るかが個々人の自己に問われている。しかし自力主義ではなく、「自分で」という自己が確立してはじめて天命（運命や運勢とは質的に異なる）を知り、天命に従うことができる。そのとき、限らない開けに通じた「自己ならざる自己」が成立する。

八木さんは自分を「イエスの弟子」と言う。私は「イエスの弟子」と言う八木さんを敬意をこめて理解できるつもりだし、八木さんの語るイエスは心に深く響いてくる。しかし私自身は「イエスの弟子」とは言えないし、「イエスの弟子」とは言わない。この点、八木さんは八木さん、上田は上田ということになるであろう。これはしかし、二人の間が結局は超えられない亀裂によつて距てられているという事態ではなく、むしろ西田幾多郎の言う「個は個に対して個」の現成であり、「我も如是、汝も如是」（道元）という理想に少しでも近づくことができればと念願している。このような「個と個」の間でどのような思想内容がどのように交わされたか、それをこの『対談評釈』が示すであろう。あらかじめ特定のテーマをきちんと立ててではなく、大まかな見

通しだけで自由に始めた対談である。語り尽くすということはあり得ないにしても、六回にわたってそのつど、かなり長時間、食事なども挟みながら、気分も変わりながらの対談であった。ふとした言葉がきっかけになり、話が曲折しながら緩急のテンポで展開する中で、根本関心が大筋で共通の「経験・自覚・言葉」という問題にあることが、おのずからはっきり現れてきた。そして自覚が言葉によって遂行されるところに両義性があり―自覚がはっきりする一方で自覚が歪められる―、それは根本的に人間存在の不安定性であることも共通の認識になった。読者の問題意識にも触れるところがあれば幸いである。

レスポンス

八木洋一

本学会の会長として会の発展に指導的役割を担ってくださった上田閑照先生と八木誠一先生（以下敬称は省略させていただくことがある）の対談がやっと実現し、昨年五月、岩波書店から『対談評釈 イエスの言葉／禪の言葉』（以下『対談評釈』）として出版された。私たちはそれを手にしている。

思い切って表題にあるような問いを発してみると、各自どこからでも、何か言えそうな気がする。この場合「私たち」とは、とりあえず本学会、その各メンバーを想定してのことだ。

私自身について言えば、私は今、二人の対談が「やっと」実現したと言ったが、実を言うと、私は個人的に、この対談が早く実現し、本になってじっくり読めるようになることを長い間待ち望んでいた。それが実現し

たのだ。この本は私が長年願っていたことの実現という意味で実に大きな「出来事」である。

ところで、対談者の一方の、八木誠一先生とは学生のときから数えて五十年の付き合いになる。キリスト教徒になるとは如何なることなのかを究明するために神学部に入學し、半信半疑でそれにぶら下がっていた十字架の贖罪と復活から成る救済の言葉が奪われ、はじめからの出直しを経験したのも先生との出会いを介してだった。

周知のように、八木誠一は、キリスト教の本質と根拠に関する伝統的な考えを根柢から批判する。もちろんキリスト教のその根源からの再生／復活を願うことである。ユダヤ／キリスト教思想史においては、この種のラディカルな批判者は、真正の預言者、またイエスがそうであったように、郷里で受け入れられることはない。これは、歴史の最大のパラドクスだ。批判者には思想的孤立と社会的孤絶は避け難い。その批判が伝統の根柢を覆しかねないと判断されれば、その分、孤立と孤絶の深さは測り知れない。最悪の場合、

死さえ免れない。八木誠一のキリスト教思想は、内容上、思想家にその種の孤立感／孤絶感を強いてきたはずだ。

批判的思想家にとっては、それにも拘らず、否、それだからこそ、孤立した自分の思索を分かち合える良き対話、良き理解者に巡りあうこと以上の喜びはないはずである。この意味での対話とは、本来、旧きものと新しきものをめぐって起こる創造的な動きであり、その動きこそが人と対話を真の普遍性へと向かわせる。この種の、人の対話を実現し、それを通して働く「創造的な働き」こそが問われなくてはならない（「事柄」なのだ。その意味で八木誠一は実に対話の人だ。例えば、滝沢克己とは二〇年間対話をつづけた。その忍耐力はどこから来るのだろうか。結果、多くの対談集の類いを公にするが、このこと自体が八木誠一の思想家としての思想の質を示している。

その中でも、一九七〇年代に実現した八木誠一と久松真一との「対話／対談」は、思想史的な観点から見て、まさに画期的な歴史的出来事であると言える。二人は仏教とキリスト教の宗教（自覚）としての普遍性＝世

界性とは何かというテーマで「人間のあり方の根本（本性）は何か」という最も根本的な問題について対話したのである。この対話は後に『覚の宗教』（一九八〇年、一九八六年増補版 春秋社）として刊行される。その序論で八木誠一は対話者久松真一についてこう述懐している。

先生との対談は私にとってまことにしあわせな経験であった。多くの貴重なことを話していただけただけではない。私の言うことを、私のいう意味で理解した上で、然るべく答えてくれる人物に会ったのは、久松先生がほとんどはじめてであった。私は多くの対話、対談をしたが、私の言うことを理解してくれない人、理解できるはずなのに、先入見や偏見が強くて素直にとってくれぬ人が多い。先生はそうではなかったのである。

さて、冒頭で私は個人的に上田／八木の対談が実現することを長い間待ち望んでいたと言った。それにはわけがある。はっきりはしないが、随分早い時期からだと思う。私の中に、上田先生は、上述のように思想

的孤立を強いられている八木誠一の数少ない良き理解者であるはずだし、対談が実現すれば、久松、西谷、秋月等の対談を踏まえて、それ以上の思想的に画期的な対談になるはずだという「勘」のようなものはたらいていた。それで、実際、上田先生との対談が早く実現するよう誠一先生には何度も機会あるごとく言ってきた。聞くところによると、一度申し込んで断られたとのことであった。ところが、今度は上田先生からの呼びかけで対談が実現したのだから、私としては大変な、うれしい出来事というほかない。

上田先生が八木誠一の数少ない良き理解者であるはずだ、という私の「勘」（読み）はどこからきたのだろうか。それにはそれなりの理由がありそうだと。

私が上田先生に直接お目にかかったのはこの学会においてだが、それ以前に先生の書かれたものとの出会いはすでにあった。「禅と神秘主義」（『講座禅』第一巻所収、一九六七年、筑摩書房）と「対話と禅問答」（『同』第八巻所収、一九六八年）を通してだった。その後、『禅仏教―根源の人間』（筑摩書房、一九七三年）と格闘す

ることになったが、その中には前者の論稿が含まれていた。このように上田先生との本を介した出会いは、一九六〇年代後半だった。

その頃の私の関心は、もっぱら「人間存在にとっての言語性と宗教性」というテーマであったから、名著『十牛図―自己の現象学』（筑摩書房、一九八二年）も含めて上田先生の書かれたもの（思想）は私にとつてまさに格好の自己修練の場所であった。その修練を通して、上田先生の思想の場所が八木誠一の思想の場所と響き合わないはずがないという確信のようなものがいつのまにか私の中に生まれていたにちがいないと思う。

さて、『対談評釈』の最後で上田先生は八木誠一との四〇年以上に及ぶ二人の「対話史」を振り返って、その在りようを三つの時期に分けている。最初の時期は、八木誠一に対して上田先生が批判的な質問をもっぱら繰り返した。しかし、八木誠一の答えのところどころに「八木さんへの同感が生まれるのを覚えた」時期であると述べている（二八〇頁）。その時期が具体的にいつ頃なのかははっきりしないが、恐らく六十年代後半

から七十年代前半の十年ぐらいが想定できるであろう。このはじめからある「八木さんへの同感」の内容の一部でも確認できないだろうか。そうすれば、四十年以上に及ぶ二人の対話が『対談評釈』として結実することになる、それを可能にした（何か）、つまり、深い根拠を知る重要なヒントになるだろう。それを知ることが、表題に掲げた『対談評釈』とは何か、という問いに答えるための根本的な視座になるはずだ。

一九七一年八月二十二、二十三日、妙高高原セミナーハウスで八木誠一（当時三十九歳）が招かれて研究会が開かれた。『兄弟』（編集発行人・久山康）にその内容が貴重な資料として残っている。それによると、二十二日は、八木が「私のキリスト教観」と題して講演し、その後で出席者を交えての座談会がもたれた。八木はその日の内に帰っている。二十三日は本人不在の形で座談会が続けられたようである。座談会の出席者は出入りがあったようであるが、錚々たる顔ぶれで、キリスト教サイドから武藤一雄、佐藤敏夫、久山康、いわば仏教サイドから西谷啓治、辻村公一等と共にわ

れらが上田先生も出席している。この会が八木誠一には「一種のつるし上げ」に映っていたようだ。

この座談会の記録を注意深く読んでみると、上田先生の八木先生へ「同感」の内容と考えられる一部がはつきり解る。二つ、ないし三つあるように思う。まず一つは、上田先生は八木誠一の話や議論に繰り返し出てくる言い回しに気づき、それに同感している。同感するだけではなく、それを座談の場で指摘している。これが出たのは上田先生一人であった。

上田先生の八木誠一に対するこの共感は、こういうことだ。「そのことは、一般的にこう言われ、こう考えられているが、『実際にはどうなんだ?』という問い方に注目し、その問い方に共感しているのだ。つまり、八木誠一の思索の根源へと向かう思索者としての根本的な構え（あり方）に強い共感を覚えたのだ。そして、この時期にすでにこう述べている。

（同感できたのは）神学的な概念枠や思考習慣や与えられた教条ですませずに「実際」を問うそのあり方です。ただ、その問いが途中でとめられてしまっ

いるように感じました。八木さんが自らに対してどこ迄もどこ迄も「実際はどうなんだ」、「実際はどうなんだ」と問いを窮めて行った場合、どうなるのか、禪からみるとここが一番面白いところです。『兄弟』一八八号、九頁、一九七二年四月)

この場合、「実際にはどうなんだ」という問いを、事の究極の真実、または真理は「実際にはどうなんだ」と敷衍して言い換えてみると、八木誠一と上田閑照が初期の段階から、何を如何なる問いとして共有していたかがよく理解できる。すなわち、思索は人間における重要な「いのちの営み」であるが、二人は思索の方法が同時に思索の根柢であるような構え (constitution) を共有していたと言えるだろう。

このことは、上田先生が八木誠一に示したもう一つの同感(＝関心)ともつながっている。

八木誠一は、その日の講演の冒頭で、「聖書に書いてあるから、そのまま真理として受け入れよう、信じようというのではなく(註、思索の批判的方法論)、納得できるところまでは考えて納得しようということ(註、

思索の批判的根柢論)」が自分の思索の第一の基本的インテンションだ、と切り出したのだ。

こう言う八木誠一に対して、上田先生は、基本的なところでおそらく同感した上で、あるいは同感したから、座談会では、終始、この八木誠一の基本的インテンションに関心を示して、「納得できるということがどういうことなのか」、「その場合の「納得の性格」について八木に迫っている(『同』一八四号、三七頁、『同』一八八号、八頁)。つまり、納得するといってもいろいろあるから、その納得の内容、「納得の性格」についてもっと知りたいから説明して欲しいというわけだ。この上田先生の問いかけは、思いがけず八木誠一から次のような返答を引き出すことになる。

上田先生の質問に対して八木誠一は、「きわめて大きっぱに言えば」と断った上で、「古い自分自身に死んで新しく蘇るといふことがあると思うのです。新しく蘇った人間に見えてくる、一つの事実として見えてくるということが納得するということです」と返答している。言い換えると、八木誠一が問題にしている「納得

すること」とは、宗教的実存がそれとして成り立つ経験とその自覚（その言語表現が「死して甦る」である）こそが納得の内容、納得の性格を決定する、そのような納得のことであるということだ。

八木誠一からのこの返答は、当日の座談会の議論の流れからすると、「予想に反して」と上田先生には感じられたようだ。八木誠一が欠席した二日目の座談会で上田先生は、八木誠一から意外な返答が帰ってきたことについて次のようにコメントしている。

「納得」の性格をおたずねすると、それ迄の議論からの予想に反して、「死して甦って新しく見えるもの」ということでした。その時、八木さんにとって「死して甦る」ということは何を意味するのか。またどこから「死して甦る」出来事がおきてくるのか。これは、キリスト教の信仰の確実性という観点からして一番大きな問題でしょう。「死して甦る」ということはまた、禪の根本でもあります。大死一番、そこで死するということが体験されるか、甦るということで何が体験されるかということが非常に大きな

問題です。

この上田先生のコメントは、先生自身の問題関心が何であるかをよく現している。

八木誠一が七一年の段階で取り組んできた問題は、『新約思想の成立』（一九六三年）以来、上田先生が指摘するように、キリスト教にとつても、また禪にとつても「大きな問題」である、まさに「死して甦る」とは人間存在にとつて如何なる経験かということであった。だから、その大きな問題だという上田先生の質問にたいしては、八木先生にしてみれば、それこそが私の取り組んできた中心的課題ですから、それまでに公にした何冊かの本をお読みください、とでも言うより他なかったであろう。

それはともかく、ここでははっきり確認できる大切なことは、上田／八木の対話史の最も初期の段階から、二人は人間存在の根本問題（死して甦る）についての関心を共有していたということである。問題意識の共有は対話が成り立つ大前提である。それだけではない。そのための思索の根柢（経験と自覚を介して納得する

こと」と方法（そのことについてはこう言われ、こう考えられているが、「実際にはどうなのか」という問い方）について、二人はきわめて同質の構えを共有していたということだ。

この両者に共通する思索の根拠と方法とは、禪の伝統の中ではつきりと、言語道断、教外別伝、不立文字、直指人心、見性成仏と言われる道に通じていると考えられる。

このように、人間存在の根本問題についての共通した問題意識とそのために必要な思索の根拠と方法という最も基本的な点での共感の上に、上田先生が振り返る二人の「対話史」の第二、第三の時期の展開も可能であったはずだ。その時期は「東西宗教交流学会」の営み三〇年と重なっている。そして、機熟して、私たちは今、『対談評釈』を手にかけている。改めて問う。「これは何か。―私たちは何をどう答えるのか―」

『対談評釈』とは、何か。この問いに上田先生自身ははつきり答えているように私は思う。現在の危機的世界状況（この認識は二人に共通する対談の底を流れる

認識である）に言及した後で、先生はこう述べている。

私としてはこの連関でも個人の意義をもう一度強調したいと思うのです。そのような中でも一人ひとり、前にも言ったことですが、その脚下は、そうした世界を踏み抜いて、貫いて、見えない世界まで届いていますから、もし新しく出発する立脚点があるとするれば、個々の一人ひとりだと思います。一人ひとり、個人個人は、自分はこうだというように、生き方を貫くことが可能です。それは単に個人的なことではなく、それが個と個に響き合って、新しい目に見えない共同体が成立していきます。その可能性は最後まであるし、現にあると思います。ですからこのような世界でもまだ成り立っているのだと思います（二七三頁以下、同様の趣旨の発言が一四〇頁以下）。

ここで言われている個人とは、文脈上、人間の本来性に目覚めた個人の意味であろう。その個人の生き方が「個と個に響き合って、新しい目に見えない共同体が形成していく」というのである。上田閑照／八木誠

一の対談と『対談評釈』は、まさに個と個が言葉を紹介して響き合う、新しい目に見えない共同体の現実性／可能性を対話という形で具体化したものだと言えないだろうか。

討議 I

司会 八木洋一

菅原

大変わかりやすいお話をありがとうございます。八木洋一先生にもお礼を申し上げます。上田先生のお話を伺って改めてこの本のことを思い出しまして、最後の方で「言葉」と「世界」について仰っている中で「虚」と「実」というお話をされていました。私は去年、浄土真宗の立場から発表させていただいたので、先生から浄土真宗のお話を伺ったことではないので敢えてこの質問をさせて頂きたいのですが、名号という言葉がありますね、私は先生のお話を、名号論を思い浮かべながらお伺いしていました。そうすると、非常に分かると思いますか、阿弥陀仏というのは虚か実かと言えば、その間になるような感じがいたします。あるいは、「かくの

上田

如く生きる」という考えにもなにか通じるところがあると感じたのですが、そのように上田先生は「名号」ということを念頭に置いてお話しなさっているのか、名号ということにお考えが向かっておられるのか、その点をお伺いしたいと思います。

どうもありがとうございました。名号ということですが、私は話をするときに自分のこととして「名号」という言葉を使うということはおりません。しかし、私が若い時から非常によく読んだ本としては、真宗系統のものがあります。実際に非常に良く読みました。殊に曾我量深さんについては、著作集が十何冊あります。これは非常に詳しく何回も読んで、私の中に入っているととても良いと思います。ただ自分が語る時には、「名号」という言葉では語れない。これは基本的に、実存的に、やはり真宗の信者ということが要求されると思うのです

花岡

ね。しかし真宗の信者という在り方が示している人間の在り方には非常に深く共感するということが今までもあります。ですから、妙好人についても（妙好人については少し書いたこともあります）、今でも非常に親しみを持っておられます。ですから、気持ちとしては通じているところがあります。

上田先生の言葉についてのお話を今日伺いまして、今までは言葉の存在論というのが最終的なお考えだと思っておりましたが、それが「一日のことをのせて雲が動いてゆく」ところに収斂してゆきまして、私は大変理解でき、ありがたく思いました。また八木洋一先生のお話は、神の根本問題に通底しているところの問題を見事に掘り起こしてくださいまして、大変すばらしいと思われました。三十年間、八木洋一先生も最初の頃からいらっしやったのではないでしょうか、大変すばらしいご発表だと思えました。た

だ一点、上田先生と八木誠一先生と八木洋一先生に質問させていただきたいことがございませう。個と個が響きあう目に見えない共同体が成立して、そして一人ひとりが真理とは何かを、聖書、あるいは仏典に書かれていることが本當か、と尋ねていくときに、そのように出来上がってゆく目に見えない共同体の可能性とか現実性も、やはり人間がこの世界に生きている限りは、人間が存在する限りは、潰れたりまた出来たり、また潰れたりまた出来たりと、最終はないと私は思うのですが、その辺を三人の先生方がどのように考えていらっしやるのか。ですから、対話にせよ書物にせよ、芸術にせよ、修行にせよ、何でするにせよ、生きている限りは、いつも二重にニヒリスティックなものが常に同時に共存している。ルターの言葉で言うところ、人間を馬に譬えれば、悪魔と神の両方に手綱を取られているところがありまして、そういうところから考えましても、やはり終わってし

まうとか、完成して悟りの境涯で大丈夫と言うことはないような気がいたします。その辺をどう三人の先生方はどのようにお考えかをお伺いしたいと思います。私は永遠に生きている限りは、レツシングはただ真理とは何かということを求めることでしか真理はないと言っておりますけれども、真理と言うのも、「われは道なり、真理なり、命なり」というイエスの言葉もございしますが、歩くということ、求めてゆく過程ということしかあり得ないと私自身は考えておりますが、三人の先生方にお教え頂ければありがたいと思います。

八木洋 所謂「完成」がどういう概念が分かりませんが、スタティックな完成というのは僕もないと思います。卑近な例で言いますと、お腹が空くとご飯を食べますよね、食べてもまたお腹が空きますよね。僕は最近「統合化プロセス」ということを言っていますけれども、統合化プロセス

というのはそういうことではないかと思うのです。最近、流しの整理整頓を私はやっていますけれども、片付けますでしょ、そうするとあつという間に汚れた皿が次々に流しに並びます、この繰り返しですよ。ふと、こういうことなんだということに気づきましたね。だから、對話が成り立たないということが一方にあると、それを成り立たせようとする運動がおこる、この繰り返しなんじゃないでしょうか。それを繰り返しと言つてよいかは分からないですね。僕は繰り返しだとはあまり言いたくない。単なる繰り返しではなくて、一見繰り返しに見えるようなことが実はそれ以外に真理はないのだ、とそういう風に私は最近思っています。ですから、問題があれば問題を解決する。解決したらまた問題が出るでしょ、しかしまた解決すれば良いのだ。それはまさに日本の今の状況ですよ。先ほど言ったような、戦後の状況というのはまさにそうだった。物凄いスケールの廢墟が残っ

て、その中で人間はいつたいどう立ち上がって
もう一度日常を獲得してゆくのか、そのための
思想は何なのかと言うことが根本的に問題にな
った、と私は思います。

花岡 今もまさにということでございますね。

八木洋 今もまさにそうだと思います。

花岡 どうもありがとうございます。

八木誠 ちよつと違う角度からのお返事になるかもし
れませんが、花岡さんのご質問にも含まれてい
たと思いますが、個が個に徹すると、まずは個
と個の出会いなんだと。そうなんですよ、確
かに共同体性から抜け出て、個が個になり、個
と個が出会うということは確かにあると思いま
す。そういう意味で、個が個に徹した時に、共
同性性というのがあるんですよ。僕は「統
合の促し」と言っていますけれども、実存とい
う言葉が流行って、実存と共同体ということが
よく言われてきましたが、実存が実存に徹すると

そこで共同体性に出会うんだと、自分は共同体
の一員なんだということがはっきりしてくるの
でね。しかし、それで共同体がすぐにできるか
というところというわけではないんですよ。そ
こでは今、洋一さんが仰ったように、絶えず新
しくということが起こってくるわけですから
も、逆に、共同体性に徹すると個も出てくるの
だと思っております。僕はそういう観点から考えて
おります。

この機会を利用して他のことに少し触れさせ
ていただきますけれども、上田さんが言葉の
話をされました、この対談は言葉について随
分触れています、全部語りつくしてないです
ね、後で読み直してみると。特に、僕は宗教言
語は表現言語だと言っておきながら、比喩の問
題を何も言っていない、言い損なっちゃったん
ですかね。比喩というのは、直喩とか隠喩とか
韓愈とかシンボルとか類比とかありますけれど
も、比喩という領域こそ、言葉が消えて事柄が

現前すればよいというのではなくて、その言葉でしか現れない現実性というのが良く出てくるので、今上田さんの話を聞きながら、もう少し比喩ということ語るべきだったと思っております。それから洋一さんがさっき言った戦争の問題ですけれども、上田さんの中にもやっぱりあると思うのですが、戦争が始まったのは僕が小学校四年で、終わったのは中学二年でした。それで言葉に対する不信というのが僕には結構強いのですよね、むしろそっちの方が強く出てしまうことがあるのだけど。考えてみますと、言葉に対する不信を抱いたのは戦争なんですよね。戦争に負けてみたら、大本営発表が嘘だらけだったっていうじゃないですか、「勝った、勝った」とワイワイ喜んでいたら、あれが全部嘘だった、ショックでしたよね。言葉ってなんてインチキなんだと、結構深刻ですよ、これは。それからもう一つは、ドイツに行ったときですけれども、ドイツには日本と日本人に對

する通念があるわけで、ドイツに行かれた方は覚えがあるのではないかと思います（私の場合、一九五〇年代の終わりだからだいたい前の話です）。ドイツ人にはドイツ人の間で日本と日本人に對する通念があつて、その通念が彼らにとつて現実なんですよね。だから僕はそういう日本人だと見られるし、彼らの通念に従つて行動することを要求されるわけで、その通念が僕の知っている日本とはだいぶ違うのだと、それが第二です。そういうことがあつて、直接経験と言うことと関連させて言葉について考え直すのだけど、僕はどつちかと言うと言葉に對する否定性の方が強く出かねないということを、洋一さんに言われて気づき、それは今言った経験があつたからかなと思います。けれども、言葉でなければ言えないこともあると対談の中でも言っているのですが、やはりもつと比喩を論じるべきでした。個人と個人が出会つたつて、まるで違つた個人同士だからうまくコミュニケ

ーションができないということもあるわけですが、その場合に比喩ということが助けになるのですね。はつきりした返事になっていませんけれども、一応こういうことで。

上田

何を答えたら良いのですかね、直接に私への問いがありましたか。

花岡

たとえば、南禅寺の老大師が自殺をされたときに、本当は自殺は老大師がするはずはないということがありましたけれども、やはり老大師であらうと神父であらうと牧師であらうと、たとえば今年のような大地震、大津波、原発事故がありますと、どんな方でも一瞬は、両面が同時にということが出てくるのではないのでしょうか。ですから、臨在の言葉の「家舎を離れて途中にあらず」とか「途中にあつて家舎を離れず」とか、両方において両方にいないという在り方は、本当の人間の在り方。修行と同時に悟りでありますし、悟るなんてことも全くないし、修行な

ることも全くない、という二つ同時のところ
が人間の姿ではないかと思っております。やはり南禅寺の老大師様でもああいふことはあり得るのではないかと、その辺をたとえば上田先生はどのようにお考えでしょうか。

上田

それはあり得ると言えば、当然あり得るわけですよ。だから、自分でこうだと決めてしまふとか、自分のことに関して他の人に關してもこうだと決めてしまうということが、問題の一番大きな点だと思えます。だからといって、こ
うでもあるしああでもあるといった全くニュー
トラルな両義性ということではなくて、どうい
う場合でもそれで終わりという仕方での完成は
単なる空想であつて、実際はやはり両方があつ
て、ただその両方のどちらが主導的に働いてい
るか、これは決定的に違うと思えます。全く
おかしいところがなくすることは絶対ないけれ
ども、おかしいところがあつても、その人が実

実際に自分をどうしてゆくかと、これは本当にピンからキリまで違ってくると思います。その問題ではないかと思えます。

上田

か。それを説明して頂ければ幸いです。

問題ではないかと思えます。

井上

今日は上田先生の感銘深いお話を拝聴致しまして、良かったと思います。言葉でしか表現しえないことなど非常に共感できるところがあったのですが、それと関連するか分かりませんが、一つ確認させて頂きたいことがあります。先生はよく「直立して我と言う」ということを強調されますよね。それは私も共感しております。たとえば、「直立しつつ我とあり」ではなくて、「直立して我と言う」ということを仰いますね。「言う」という時、誰に向かって言っているのか。自己が自己に対して言っているのか、これは経験と自覚ということと繋がってくると思うのですが、「直立して我と言う」というその「言う」は自己が自己に向かって言うのか、それとも誰かに向かって言うメッセージ性があるのかどうか

基本的には自分の自覚として「我と言う」ということであって、誰かに対してということではありません。もちろん「誰かに対して」ということが二次的には起こってくるかもしれないけれども、そして実際には現実には起こってくるわけですが、私が「直立して我と言う」と言ったときには、自分の在り方として「我と言う」、それが自覚ということだと言いたいと思います。もちろんその場合にも、ポツンと我ではなくて、やはり直立するという時に、一つの開かれた場があるわけですね。その場の中で「我」と言っているわけだから。この開かれた場ということとは、私がいつも言うことですが、二重になっただけで、つまり自分の周りにぐるっと輪があるような形で、これは具体的に世間と言っても社会と言っても、世間と言っても良いわけですが。しかし同時にそれだけではなくて、そう

長町

いう輪を包む限らない開けがあつて、二重になつてゐる。それで初めて「我と言ふ」と。ですから、限りにない開けだけに関わつてゐるときには「我なし」となるわけです。だいたいそういう風に考えております。

八木洋一先生が四〇年も前の上田先生と八木誠一先生の共感が触れ合われたことをご紹介くださり、大変面白いと思つたのですが、もう少し理解したい点がございました。実際にはどうだつたのかと問い進めてゆかれる、そのような思索の営みというか、方法が同時に思索の根拠であるような構えと一つになっていると八木洋一先生は仰いました。上田先生にとられては、まづそういう風に問い進めてゆく方法とか道筋に深く共感されたということは私も受け取れたのですが、同時にそれが思索の根拠である、ということに、上田先生は共感されていたのかとお伺ひしたいのです。やはり哲学思索にとりまし

上田

て思索の根拠という問題は、哲学者は様々に問題化するわけで、思索が自らに遡源してゆく思惟そのものがどこから成立してくるのか、そういう問題について上田先生は当時から八木先生のお考えの仕方に感じておられたのか、もう少しお聞かせ頂ければと思います。

問い方としては、思索の根拠という形で術語化してゆくことはできるけれども、もっと率直に言えば、「どうしてそう考えるのか」ということですね。これは八木さんに対してだけではなく、誰かの話を聞いて、あるいは自分で何か話をしたとき、振り返って、いつも「どうしてそう考えるのか」と、これは私の癖といつてはおかしいけれども、そこがどうしても気になるのです。それがはつきりしないと、相手が何を言おうとしているのか、はつきり掴めない。だから「どうしてそう考えるのか」というその問いとして、考えて頂ければ良いのではないかと思

います。

長町

そういたしますと、八木先生は当時からラディカルにどうしてそう考えるのかという問題意識を真つ直ぐに表明しておられたと、上田先生がお感じになっておられたということですか。

上田

そういう問いは私が自分でそう問うわけです。八木さんの場合には、私の受け取り方からすると、いつも結論をはっきり出されるのですよね。だから、「こうだ」という風になっている。そして私は「どうしてそうなのか」と問うてゆく形になっている。これは八木さんだけということではなく、私の癖で、誰と話をするときにもそこが一番問題になるのですね。

吉田

上田先生に伺わせて頂きたいのですけれども、ある時期から先生は「虚語」という言葉をお使いになるようになりますよね、この御本で言えば二二三頁ですが。上田先生は先ほどの言葉の世界のところ、黒姫山と妙好山についてのお

子さんの詩「一日の出来事をのせて雲は動く」

を实ではなくて虚である、すなわちそれを「虚語」と仰います。これは、日本の伝統的な芸術論の虚実皮膜の「虚実」からこのお言葉をお作りになった、と。わたくしは、先生の仰います言葉の世界、詩の世界では、むしろこちらの方が実語となると思うのですね。先生の仰うとすることは分かるのですけれども、「虚語」とお呼びになる、その命名のなさり方ですね。詩の世界では実語であるそこを虚語と仰る。日本の伝統的な芸術論からお取りになったということですから、むしろ詩の世界ではこちらが実語ですよ。ね。「存在の手ごたえ」が感じられるところから発せられたという意味では、まさに実語なわけです。そういう意味では虚語ではなく、実語という言い方に変えても良いのではないかと思うわけです。

上田

あなたが変わるということであれば、なるほど

と分かりますけれども。ここの連関は、そこに挙げたさつきの子どもの詩ですね、それを手掛かりにして論じているところですから、その詩で言えば、「黒姫山と妙高山の間に日は沈み、その時すうつと私の目の前を通る」というそこを、わたしは一応「実」と見るわけです。ですから、それに合わせて、その実に対して「一日の出来事を載せて雲は動く」を虚と言ったのです。その連関の中の言葉遣いですが、そして、この連関の中の言葉遣いではありませんが、「虚」の言葉はやはり人間が語る言葉、そのことは同時に人間の在り方の中に、その可能性がきちんとあるのだということを言いたいわけです。

八木洋 それでは、これを持ってこのセッションを終わらしたいと思います。